

この本が出版されたのは古く一九六六年ですが、いささかのエピソードがありました。そのそもその出発点は一九六四年にさかのぼりますが、地方のあるテレビ局で「星空への憧れ」というタイトルで座談会をやったのが事の起こりでした。参加者は私のほかに、古くからのコメットハンターたる池幸一氏と、今は亡き有名な竹林寺住職の海老塚龍雄氏の三人でした。新春のことで大空に向っての大きな夢を語ったのですが、この番組を見ていた高知新聞社の学芸部のH記者が「これは面白い」と思って、私に学芸欄での連載を書かせてみようと思ったのが、事の起こりでした。

数日後H記者が来たとき私は「ハッ」としました。『大昔どっかで会った人だ』と思いましたが、彼の説明によると幼稚園が一緒だったそうです。

連載は「関・ライズ彗星」発見の下りから始まりましたが、意外に大きい反響がありました。外部からの電話や投書は無論、明日の続きを待つ場面では、社内の人が待ちきれず

に編集部へ次の原稿を見に来る始末で、担当の記者は第一回を発表したところで、この連載の成功を確信したと言います。

連載は「星空への招待」というテーマで四〇回に渡りましたが、その最終日がある「池谷・関彗星」の発見の日であったことに、運命の不思議を感じます。

この新聞連載によって県内のたくさんの人からの手紙や訪問を受けました。それまでどちらかと言うと孤独にこもりがちだった私が一気に外交的となり、嫌いだった多くの講演をこなすようになりました。ある日の一人の記者の訪問が私の大きな出逢いの場となったわけです。

暫くして土佐山田町のMさんというご婦人がやってきました。その人の父は古い天文家で、何でも明治時代に彗星を発見して、夜中の三時に東京天文台に電報を打ったといいます。それが何であったか判然としませんが、そのような古い時代にこの土佐にコメットハンターが居たとは驚きです。

明けて一九六六年の春、この連載が本になりました。東京と高知で出版の記念会を行いました。最初に買ったある若い女性からの手紙に『私が先で人生に失敗するような事がある

ったとしたら、もう一度この本を読み返してみたい。「との
読後感があり心を打たれました。この本は星を語る本と言っ
より一種の人生読本でもあったのです。